

連載

50 在宅医療奮闘記

平成7年より
在宅を開始した

私の思い出

(医)東西会 千舟町クリニック院長
橋本 満義 (64歳・内科)

オーストラリアより愛をこめて (スカイプ通信)



4年前のある日、他事業所のケアマネジャーさんから78歳の男性で脳梗塞後遺症による構音障害と片麻痺で糖尿病インシュリン療法を要する寝たきり状態の患者さんを紹介されました。その患者さんは奥さまと二人住まいで、奥さまがインシュリンの注射をしたり、お薬の管理をされていました。そしてヘルパーさんに手伝ってもらいながら入浴介助をしたりと、その様子はまるで奥さまが看護師の役をしているかのようでした。このように、国策だからといって自宅での

在宅医療の継続はとて大変なことなのです。

その上、患者さんが食欲不振による脱水症状や発熱、風邪の症状として急性腎盂腎炎など治療が必要な場合は、奥さまが病院まで送迎されていたのです。初めて在宅医療(訪問診療や往診など、24時間・365日体制)の制度について知り、依頼を受けた当院が定期的に訪問することになったのです。

在宅医療を始めてしばらくたったころ、患者さんの症状について息子さんへ説明して欲しいと奥さまから頼まれました。息子さんは、グローバルスタンダードの現代に即し、オーストラリアで旅行会社を起業していました。その旅行会社の「オーダーメイド日本観光ツアー」は大成功をおさめていたのです。指定のあった午後8時ごろに訪問してみると、そこには大きなモニターに映し出された息子さんがいたので、モニター上の息子さんと患者さんと奥さま、そして

私とでパソコン用通信ソフト「スカイプ」によるテレビ会議のようなコミュニケーションをとることとなりました。

息子さんは在宅医療制度にとっても興味をもったようで、「感激したとともに日本には良い制度があって恵まれているんですね」「もっと早くこの制度を知っていたら安心できたのに」と述べられました。そして患者さんへの在宅医療の協力と継続をお願いされました。

在宅医療に関わって20年近くの私ですが、親子の関係が希薄なこの時代において、このような心温まる場面に出会うことは稀で、とても感動したのです。

その後は、有料老人ホームでこの「スカイプ通信」を使い、県外に住む息子さんと毎日コミュニケーションをとっている場面を目にしています。私はアナログ人間ではありますが、感性だけは時代に遅れないように研鑽をつみ、新しい時代に対応した業務に邁進したいと思っています。

現在、高齢者や在宅療法をサポートする地域包括ケアの充実が国策となっています。

独居の孤独死やゴミ屋敷が社会問題となっていますが、当院が20年前に在宅医療を開始したころは、あちこちにゴミ屋敷があり、独居老人がネズミと同居していたりして在宅医療の遂行には大変な苦勞があったものです。

今回の件を考えると、国策だけでは不十分です。日本の良き伝統である親子の「情」や「絆」を大切にすべきなのです。ですがそれは今、危機状態にあるといっても過言ではありません。

近年、グローバルスタンダードの時代となり、世界で活躍する子どもと、離れて暮らす親との遠距離な関係を、行政がどのようにサポートしていくのか、それは今のうちに構築しなければならない課題なのだと思います。

「お医者さんが来てくれる」

24時間・365日態勢で対応(松山市全域)

私たちは質の高い在宅医療・看護・介護を目指しています。



医師数 18名
(常勤6名、非常勤12名)

内科・外科専門医 15名
(国立がんセンター勤務歴有3名)

精神科専門医 2名
麻酔科専門医 1名
(ペインクリニック科)

末期がん治療(緩和ケア)相談室開設!

Hyper Blood Viscosity(高血液粘度群)を科学する
臨床生命科学(体質・病態学、栄養学)研究所開設

機能強化型・有床 在宅療養支援診療所

(医)東西会 千舟町クリニック

松山市千舟町6-4-9 Tel:089-933-3788

<http://www.touzaikai.jp/>